報告10　フィンランド

学びの土台

９月 29 日。フィンランドの首都ヘルシンキに隣接する人口 22 万人の都市・エスポーにいる。昔、ノキア村にあったゴム長靴の工場は、ケータイ電話で世界のトップ企業となり、その NOKIA 本社が湖畔に建っている。

＊

朝９時前、「ホスマリンプイスト学校と保育園」着。マユト・タカネン校長は、午前中の時間をすべて私たちの視察に当ててくれた。

○学校は 2005 年秋にできた。ヨーロッパで屈指の木造建築学校。学ぶ環境を考えて設計している。多様なスペース、使換えができる、バリアフリー。

○秋から新学期が始まり、保育園に 100 名（１歳から５歳）、学校で 171 名（就学前学校６歳児と１、２年生）が学んでいる。

○特別なサポートが必要な子は今年は 42 名。内、移民の子どもが 40 人。30 か国の国籍もった子らが学んでいる。母国語の授業を受けることは権利であり、特定の宗教を学ぶ時間もある。学習の障害（遅れ）のサポートがかなり必要な子どもたち、知的障害のある子は今年はいない。

○保育園と学校で共同のカリキュラムをつくっている。それぞれのカリキュラムにそってそれぞれの先生が教えて、評価している。

▲さまざまな国籍の子らが学ぶ

＜質問＞どうして、保育園と１、２年生の形態のこの学校をつくったのですか？

統計では１、２年生の特別なサポート率が高いので、それに重点的に力を入れるためですか？

○そういうことです。ここの教育方針で大事なことは、ちいさな子どものサポート、学校に通い始めた子のサポートです。丁寧に教育するグループが多様なのです。

○プレスクール（就学前学校）は３クラス。サウコ（ビーバー似の動物名）クラスは、保育園教師１＋特別教育教師１（４時間／１日）＋アシスタント（学校が給料）＋保育士（保育所予算）の４名で８人の子どもに。午前はプレ教育で午後が保育。

○「ビーバー」は就学を１年遅らせたグループ。「アザラシ」は１、２年いっしょの柔軟なクラス。「オオカミ」は移民の子だけ 11 名で２名は２年生（フィンランド語は全然できない）。「クマ」は２年生の２グループがいっしょ。「コウモリ」「リス」「ハリネズミ」は、学習の障害がありサポートが必要な１、２年生が混在。

○１、２年の過程を３年かけることも可能。親、先生、校長みんなで話しあって判断する。カリキュラムが達成されていなければ次の学年には上がれない。建物の基礎とおなじです。

＊

この学校はフィンランドでもめずらしい実験校、モデル校だ。しかし、校長は誠実で意欲的で、ベテランも若手も教員たちの熱心さがビンビン伝わってくる。なによりも子どもたちがはずんでいる。

学びの土台は、そんな学校という人間と人間がつくる優しく豊かな時空間で、確かにはぐくまれるものなのだ。　　（薗部英夫）